

新年礼拝

労苦から誇りへ

学院長・宗教総主事 佐々木 哲夫

⁹ 人が労苦してみたところで何になろう。

¹⁰ わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。¹¹ 神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。

¹² わたしは知った

人間にとって最も幸福なのは

喜び楽しんで一生を送ることだ、と

¹³ 人だれもが飲み食いし

その労苦によって満足するのは

神の賜物だ、と。

¹⁴ わたしは知った

すべての神の業は永遠に不変であり

付け加えることも除くことも許されない、と。

神は人間が神を畏れ敬うように定めされた。

¹⁵ 今あることは既にあったこと。

追いやられたものを、神は尋ね求められる。

コヘレトの言葉 3章 9-15 節

¹³ あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。¹⁴ 何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。¹⁵ そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、¹⁶ 命の言葉をしっかり保つでしょう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄ではなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。

フィリピの信徒への手紙 2章 13-16 節

新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします



「サラリーマンの三つの悪は、目覚まし時計とネクタイと満員電車だ」と銀行に四年間勤めてやめた人が話しました。生きるために労苦するのか、労苦するために生き

るのか、仕事は労苦だったのでしょうか。労苦を直視した人物が旧約聖書のコヘレトです。コヘレトとは伝道者の意味です。コヘレトは次のように言います。「…天の下に起こることをすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べた。神はつらいことを人の子らの務めとなさったものだ。わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めたが、見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであった」(1:12-14)。コヘレトは、この世のすべて、知恵、金銀、快樂、幸福、貧困、生きること、死ぬことなどを極めようとしていました。本日の旧約聖書の箇所は、労苦、仕事に関する探求の部分です。「わたしは知った。人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだ、と。人だれもが飲み食いし、その労苦によって満足するのは、神の賜物だ、と。」最後に、コヘレトは次のように記して書物を閉じています。「…すべてに耳を傾けて得た結論。『神を畏れ、その戒めを守れ』これこそ、人間のすべて。神は、善をも悪をも、一切の業を、隠れたこともすべて、裁きの座に引き出されるであろう。」(12:13-14)



本日の箇所の 10 節でコヘレトは「神が人の子らにお与えになった務めを見極めた」と記しています。「務め」という言葉は「仕事」とも訳し得る言葉です。仕事は、英語で「ビジネス」です。ビジネスは、busy+ness ですから、「忙しいこと」と解釈できます。確かに、仕事は「忙しい」ものです。ところが、ビジネスの語源を調べてみると、元々の意味は、「忙しい」ではなく、「ケア(面倒を見る)」です。すなわち、ビジネスは、「金儲け」や「商売」というわけではなく、人間的なあたたかみのある言葉だったのです。このことに関し、哲学者ハイデガーは、人間は「ケアの中に生まれ、ケアとともに生き、そしてケアの中に死んでいく存在」と言いました。「人間はケア(介護)する存在である」(『存在と時間』第 42 節)と説明しています。これは、福祉の精神だけでなく、仕事の本質を言い当てています。

仕事を意味する英語の言葉がもう一つあります。コーリングです。あまり日本語化されていない横文字です。「コール」は、「呼ぶ」です。電話の呼び出しはコーリングです。神から呼び出されて務めるよう導かれた仕事、天職をも意味しています。500 年ぐらい前のこと、仕事は二つに区別されていました。神から与えられた天職と、それ以外の仕事の二つです。天職は聖なるもので、天職以外は俗なるものと考えられていました。例えば、礼拝で賛美歌を歌うことは聖なる仕事であり、聖職者による聖歌隊だけが歌う仕事でした。礼拝に集う会衆は、聖歌隊の歌う聖歌を聞くだけで歌うことはしませんでした。神が創造された世界は全て聖なる領域と考えたのが、マルチンルターです。彼は、聖と俗を区別するのではなく、天職は誰にでも与えられるものと考えたのです。例えば、宗教改革以降、教会で会衆みな賛美歌を歌うようになりました。

仕事に関し、「神のなさる業は、始めから終わりまで見極めることが許されていない」と記しているように、コヘレトは理解に苦しんだようです。コヘレトにはっきり言えることは、

「人間にとって最も幸福なのは喜び楽しんで一生を送ること。飲み食いして、その労苦によって満足するのは神の賜物だ」ということでした。「飲み食いして満足するのは神の賜物」ですが、毎日宴会を楽しむわけにいかないことを私たちは承知しています。仕事を本質的にどう考えたら良いのかは課題です。本日の新約聖書の箇所注目したいと思います。



パウロの言葉を三つに分けて考えたいと思います。第一は、「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神である」です。私たちは、自分の思いで望み、自分の思いによって行動しています。パウロは、そこに神がいるということです。わたしたちのうちに働く神です。にわかには実感しづらいことです。イエスキリストの次の言葉を参照したいと思います。

偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとしてあなたがたのところに
来るが、その内側は貪欲な狼である。（マタイによる福音書 7 章 15 節）

私たちの内に何が存在しているのか。パウロはフィリピの信徒に、内に神が働いていると伝えています。

第二は「何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい」です。不平とは、相手の考えなどに同意できないこと。理屈とは、それゆえに開陳される自分の考えや意見のことです。不平に関する興味深い事例は、旧約聖書に記されている「不平を」です。エジプトで奴隷とされていたイスラエルの人々が、モーセに導かれてエジプトを脱出し、故郷カナンに向かって荒野をさまよっていた時に、人々はモーセに不平を言ったのです。引用します。

我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。」
（出エジプト記 16 章 3 節）

「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。（民数記 11 章 4-5 節）

第三は、つぶやかないようにと勧める理由です。「こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができる」からだと言うのです。キリストの日とは、この世の終末や、個人的な終末を意味しています。再臨のキリストがすべての人間の来し方、人生の決算をする審判の時のことです。その時、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと誇るこ

とができるということです。

ビクトール・フランクルの書物『夜と霧』につぎのような出来事が記されております。1944年のクリスマスから1945年の新年の間、わずか数週間間に、収容所ではかつてないほど多くの死亡者が出ました。原因は、労役や栄養などの状態はいつもと同じでしたので、囚人の多くがクリスマスに家に帰れるだろうと期待した希望が実現されなかった「失望」が原因だったと考えられました。フランクルは、次のように語っています。心の支えには、二つのものがあります。一つは、将来に置かれたもの、もう一つは、永遠に置かれたものです。永遠に置かれた心の支えは、将来の何かを支えにする必要がありませんでした。強制収容所の人々の場合、生き延びて解放されて、自由な生活に戻るといふ実現不可能な無理な要求を自分に負わせなくとも、永遠への気持ちをもってしっかりと生きることができた人たちがいたのです。

私たちが従事している仕事もそうなのでありましょう。目の前のことや将来の何かにではなく、人生の最後に、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと誇ることができる「天職」の思いです。仕事自体への誇りが、仕事をする人の人生を形成していくのです。「労苦したことは無駄ではなかったと最後の日に誇る」を心に収め、新しい年を始めたいと願うものです。

(2023年1月4日)